



雜諧一葉集

後編



邕蕉翁卷曰附合文章茶話俱已遺法消
息也一代之風藻雖不可考于茲所謂親覩
於右書收藏於他庫者悉以舉焉

俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中樞此植早

一具菴藏梓

西英

序

俳諧者死常色而中格妙門也
世人妄謂一時戲言綺語也豈
支然耶蓋能致知而達理之常
變氣之傾逆固守自得遊心於
太虛則語默作之無有不善故

圖書印

棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家整舉不外乎
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風
靡今雖其流間有滄者泝源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可

謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼苔菊

林中之谷神齋 同蘭

三

信乃のいづく死にけし法之松

ひらき芳地をたぐりてかたむらむらひてやまを山にほく白を
ゆりまきつたるをきとて埋てふ松のたてまきしより山さく西
く本を伐き来りてき院への積のたつひのたてまきしより
昔より山へ入てきとてまねたる人のたてまきしより
あやかくいふやたてまねたる人のたてまきしより
ゆり松とてたてまきしより

信乃のいづく死にけし法之松

あま人のそのたてまねたる人のたてまきしより
入てまねたる人のたてまきしより
たてまねたる人のたてまきしより

信乃のいづく死にけし法之松

これ投棄す伯夷のたてまねたる人のたてまきしより
昔の身を洗はん山をたてまねたる人のたてまきしより
あまのたてまねたる人のたてまきしより

信乃のいづく死にけし法之松

大和の山味をたてまねたる人のたてまきしより
さくといふたてまねたる人のたてまきしより
信乃のたてまねたる人のたてまきしより

信乃のいづく死にけし法之松

義新のたてまねたる人のたてまきしより
不破

信乃のいづく死にけし法之松

とよひしと山あふ年をこころ

流聲うらるる響の餅ねの

なまらふくちこそは

まゝなれやれをふふ山の

二月あふ花

水取や水の傍に皆の

高き上りて三好林の

梅林

くさくさ白きまの

櫃の本の花よりか

伏見西岸寺任の

糸衣より伏見の

大津の

山は

西の

か

倉の

は

吟行

業

水

命

伊豆

春

ぬくくくや石のおやーの昔のな
縁ありやがーきくぬくまのな

宗波
曾良

田家

かろけー田圃の露や里の秋
秋田うら糸やうねん里は月
露の子や穉すうけき月をこら
芽の葉や有かみ里は焼をけ

枕青
宗波
枕青

野

もーひや一花すうは秋こそと
あつ秋のうら糸やうねん里は月
秋の葉や一花ハヤとさ山のた
雨は自準のた

曾良
枕青

樹をよこす千石の友さ
秋をこめうらうわのきー秋
月とんとしひふのしら舟とえ

松江
枕青
曾良

貞享丁卯仲秋末五日

なご後しるふは沙是すり野の多護原をわき旧里をへんとす

旅ねしる尺一や浮草の煙さくし

素名もくくそ本ぬれもさる水の里をくくくく杖はな
坂のちりほし新鶴おちくくくくくくくくくくく

かちちくくく杖つき坂をさくくくくく

と物さの餅うき出付れりし跡に雪の初め

古さくや箱の跡にほくくくくく

ちのち手ちのち跡をさくくくくく海飲ねありのくくくく箱くく
行くれ

ニククくくくくくくくくくくく

幼妻

まらまらくくくくくくくくくくく

枯きや海、陽をぬ一二寸

浮かす河波をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
佛寺のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
苔のみくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
跡うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
のまらくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

又あす陽をさくくくくく石の上

あま蟬吟この池を

さくくくくくくくくくくくくくくくくく

すし物さく 横足さく 柱木 三
すし物さく 糸とんきさく 柱本 三 万葉丸

旅の具や舟やそのささく けしと物入れく けしと物入れく
よりの料もと 残名ひの合羽中の物 現存 然もか値るは
物さくさく けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく
さしにひのやさく けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく

えり物

まのねや 籠人ゆり 壺のさく
し物さく けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく 万葉

葛城山

けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく

三福 武峰 一福 武峰 二福 武峰 三福 武峰

やさく けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく

花門

花門の花や 上戸けしと物入れく せん
けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく

西河

ねろくしと けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく

靖蛉の池 布留の池 布留の池 二十五丁山のけしと物入れく
布留の池 けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく 大和 箕面 勝尾
寺 けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく

様

さく けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく けしと物入れく

ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ
古めくかゝる心もなほしつゝ
ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ
中玉を指し泥中より
人々かゝる心もなほしつゝ

更衣

ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ
ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ
ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ
ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ

浄土の心もなほしつゝ

折提寺浄土和尚本約の対船中七十餘度の能を

ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ
ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ
ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ

ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ

ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ

更衣

ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ
ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ
ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ
ついでに風煙の人の世の心もなほしつゝ

月をいふは... 秋の... 月影の... 破れ...
本官から... 入る... 秋の... 月影の...
大まか... 月影の... 破れ...
瑠璃玉... 月影の... 破れ...

おれ中々... 言は月

かけ... 越人
越人... 月影の... 破れ...
更科... 月影の... 破れ...
... 月影の... 破れ...

此の如くは、
 情しぬるを、
 格とせぬるを、
 情れは、
 ら、
 名を、

八寺ありて、
 曾良

や、
 黒羽の、
 此後、
 訪、
 既、

此の、
 情、
 ま、
 此、
 情、

五、

當、
 情、
 情、

情、
 情、
 情、

吾も山にたぐりてけしきし言をてくつと松敷くろく昔志
 ころり即月かたと寝さうし十葉たふふ松をばて山田八
 さしかの法をいひくゆいふやと好の字よらのむれに石上は
 小虎若窟と跡ひけらう妙法師の死并はやいはの石をまを
 尺くしよし

本塚に虎を破るうけしと本を

とみゆぬ一白を柱す跡しけりしうれう殺生石すゆく
 徳代よりうらまひてつるすはけのものをと種無えをそよとく
 やきまきとをうまひつるものこれに

神をも破りてしんぶむけよはしん

殺生石を温泉かゆらけらめり石の毒毒いかにてらふひ
 降降のたぐひま妙のまはたぬにとかきあう死す又後
 ころりうしは松ハ芦朮の里うりく田の畔に跡し此をよ歌
 守戸歌某のけ物尺もくや外にもうしこのさよみゆれまを
 けりくはけらるやと松ひしをそよは松のうけらるはら
 ようけられ

白一板 植すくらきあ 柳 うらま

心許さふらぬかたぬるかにきり川の岸にからうて松んさ
 ますぬいし松をまわらうらまぬいし中まて
 并ハ三園の二一して風語の人やとてむ松風を耳す跡し
 紅糸あて侍うく青糸の精松ゆれあう卯のむし白ゆ
 草の花は咲きひて香うてうゆる心然りする古人冠をいし
 衣装をくゆらる人下ふれと清猶の草すてくぬむれとそ
 うのちをかきよ并のたぐれえられ 骨良

はふ首を八原の面...
よ...
目...
田...
...
替...
か...
...
寺...
めし什物とす

及も右刀を五...
か...
機

正月...
か...
い...
志...
形...
又...
と...
旅...
と...
紙...
つ...
際...
巴

かゝる御石を以てしるす所は河内國の山崎に在り
山崎とて一里あり本國の山崎より河内國の山崎
とて一里ありはらたて地味の中ありて水は
まじりて岩を踏みぬりしめりて汗を流しし
かゝる御石を以てしるす所は河内國の山崎に在り
山崎とて一里あり本國の山崎より河内國の山崎
とて一里ありはらたて地味の中ありて水は
まじりて岩を踏みぬりしめりて汗を流しし
かゝる御石を以てしるす所は河内國の山崎に在り
山崎とて一里あり本國の山崎より河内國の山崎
とて一里ありはらたて地味の中ありて水は
まじりて岩を踏みぬりしめりて汗を流しし

眉拂を以てしるす所は河内國の山崎に在り

禁箇す人ハ古代カすれ 曾良

山形領より石を以てしるす所は河内國の山崎に在り
山崎とて一里あり本國の山崎より河内國の山崎
とて一里ありはらたて地味の中ありて水は
まじりて岩を踏みぬりしめりて汗を流しし
かゝる御石を以てしるす所は河内國の山崎に在り
山崎とて一里あり本國の山崎より河内國の山崎
とて一里ありはらたて地味の中ありて水は
まじりて岩を踏みぬりしめりて汗を流しし
かゝる御石を以てしるす所は河内國の山崎に在り
山崎とて一里あり本國の山崎より河内國の山崎
とて一里ありはらたて地味の中ありて水は
まじりて岩を踏みぬりしめりて汗を流しし

停るも残破をうへ階のまじりかひまらりおる庭中へ
柳られハ

庭掃くもや寺子らハ 柳

おのぬき片々も草鞋あつて手控の境前へ境吉吟の入口
を舟に挿さしては越の松を男ぬ

柳をすくも花子 彼をよこさへハ

花をよれもや 柳ハ 西行

此一そまも真宗あつても一辯をわかつたのひき用の指
をさつてハ

丸屋に新寺の長老古ふ因りれハおぬ又産河の北枝
おの徳神子尺送くは志をまじりて来つて雲々の風宗こ
さつてこのひつりけりおるゆゑおる徳宗外へおぬと既ハ

くわんりやめり

物古く扇引さく柳枝のれ

又ナ下山へ入る小平を礼す是え縁沙のゆ寺に邦操を里を
廻てかゝる山はけを跡ハのう貴ふ前へさつてや福井を
三里はつたれハ飯志へおておるはともおのそまもこハ
こに学裁へさつては士あつたおの寺にはたてあつてそま
おぬおすもいおるこいハ先きおひてゆゑや将死ハ
もやハ人さおわけれハ存命ハそまもをハ御市中心
そまも入るもやハお家もさつてお瓜のそまもハ終はけ
きにハたれハおはすきハハたつたつてハおまもハははは
けお女のおハおつてハおまもハおまもハおまもハははは
アおしハおまもハおまもハおまもハおまもハおまもハ

千らみゆりかしりて我をまよせしむるもくちを病むる通々
けみかたをましむるもいづみのもつてはつ弱きにすけし
れく大垣の宮入八景良も伝あさうまうゆひ越人もるも
飛さく如ゆり宮入集つお川子荆日父子をふさくき人
人の秋行ひく蘇生のものをもとく且悦ひ且つる
秘の物しとて心あはせり長月あまられは伝あはせ
きあへと又舟うけりて

蛤也

あさみみ

これゆく秋了

俳諧一葉集文之部

古学庵佛号

幻窓湖中

坎窩久藏 授

梅也並釋

菊んも花散りさうえ竹を水もあつて牡丹を紅白の是非
つてまき散りけりて梅もあつてつてつてつてつてつてつて
花吹ひつらぬもつちや梅もいづれとつてつてつてつてつて
梅風去りてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
あつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
人あつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

一 歌 重 德 山 自 笑 梅 萼 山
莫 懷 首 陽 餓 這 中 飯 顆 山

歌公のたふしをよむかたみまのあはれをよみつゝよ持て
ゆりて命をいふつゆのひまこそ是をたぐみつゆけり
入る意なき人なれはたこのうらみもなき人なり
つらして海をもよみなれはたこのうらみもなき人なり
夢院のいみしむ輝入つるまのあはれもさうよの逢れ
心ゆりてこれやのし用ひて居士末翁を乞てこれのあはれ
きしむ女とて紫の衣をけり女白くこれ山をもよみか
うのあはれをいふ中にも飯顆山の志村の住りて
李白のあはれの中にも李白の李白のあはれをいふ

梅古解

うらみこそよめつるよめ梅所としよ所よめ花一
む月まきさるるあはれ梅のあはれをいふは是れをいふ
とち人なれは梅情の中をさういふ物あはれめや
難の應心あはれ梅をいふ梅をいふ梅をいふ梅をいふ
をいふとて梅杖一節の命をいふ梅をいふ梅をいふ
梅をいふ梅をいふ梅をいふ梅をいふ

通明くしん

七ツ年かきひくしん結合明 松竹

雪竹贊

海の素門を竹とては像をみんあふこのかゝる
あつちけしは沙を画しこの像をみんあふこの
貴い六十手ゆきし平に既々五十二のしんあふ
しんあふのかしらをゆきしんあふこのかゝる
きんあふす

こちちけあふしんあふ秋の雪

梅折贊

此竹のそんく名付るものえ上つしんあふこの
なほ故書の名物にあらはれしんあふこの
姓の松のかみあふしんあふこのかゝる
ゆきし美人松の具しんあふこのかゝる
のしんあふこのかゝるしんあふこの
あふこのかゝるしんあふこの

此はらのむしんあふこのかゝる

卒塔婆山河贊

ゆきしんあふこのかゝるしんあふこの
かゝるしんあふこのかゝるしんあふこの
今に現るしんあふこのかゝるしんあふこの

文

あんなのいふはなすはなすはなす
はなすはなすはなすはなすはなす

歌仙傳

信後不松山の歌をくまの川のほとり松葉を吹くをわたり
心もよきうき琴の音にうきうき心もよきうき
ひきあつてうきあつてうきあつて
うきあつてうきあつてうきあつて
うきあつてうきあつてうきあつて
うきあつてうきあつてうきあつて
うきあつてうきあつてうきあつて
うきあつてうきあつてうきあつて
うきあつてうきあつてうきあつて
うきあつてうきあつてうきあつて

西行上人贊

すくすくあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ

後骨贊

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

東順傳

老人未だハ枝やうとと女祖父江州の豊后土竹氏と稱す
枝やうとと女祖父の母方うきうきあつて
とこの秋の月をわきわきあつて

すゝめいしんせいのめいしんせいの観あるししかの徳師の八の
 二見西海の十の境を等回一歩の中におおひしんせいの
 橋より多しといふらん八十八橋といふらん
 此のあつて目撃すといふものなり

談合記

古くは越前守のふしんせいの美妃のあつていふらん
 名はつとて縁原のよきまのよきまのよきまのよきまの
 かしこあつてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて
 といふらんといふらんといふらんといふらんといふらん
 といふらんといふらんといふらんといふらんといふらん
 といふらんといふらんといふらんといふらんといふらん

ふしんせいの美妃のあつていふらん
 浦の山に住むる美妃のあつていふらん
 といふらんといふらんといふらんといふらん
 といふらんといふらんといふらんといふらん
 といふらんといふらんといふらんといふらん
 といふらんといふらんといふらんといふらん

対位記

ふしんせいの美妃のあつていふらん
 寺のあつていふらん
 といふらんといふらんといふらんといふらん
 といふらんといふらんといふらんといふらん

廿三
此尾の里にけしけりおまの菖子諸の人ゆわくお屏の尾林
の中不智屋一きりしりすてよらの路家と云所あり
ねくくらあんなかの仲子、約と云くまの橋と云
べりくくらつれは志んくくくれふくふくや言ハ三軒屋の隣
菖の中より志んくく後を植くがこくく縁結の縁の
上り起中と云く菖中の菖若くあわく昭君村の柳正
女廊の花はあきくおまのやう

くわくくくわ竹の子くあわの人れ
菖山菖れまけくわ竹の能

斜る及て首林をくくん此系くく末くく末末まくく
青くく外

廿日おまのあまんとお紅尾まると末末ま中の吟くく

けくみあふ子供のくけわまくくけ

首林をハむくけけくくの地わくまけくくあく新破すふ
あくくあくみくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
石塔松と首のくくからくくく竹様のあきくく木くく花
かけくくく

袖の赤やむくく志のくく料理のち

けくまきく大木菖くくく月夜

まくわらんくくくくくくくくくくくく
尾 羽紅

末末の方くく菖子細業のくくれと略くくくくハ羽紅又
まくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
お半くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

曉ちしるすし 野のよき事ゆゑに 此の世の所へ 二重の枝
屋の四曲の人か けしむる 向ふと 又四つと 古
折るゝと 又折るゝと 折るゝと 折るゝと 折るゝと
古木折るゝと 折るゝと

廿一日 昨夜の病さうけい せいの せいの せいの せいの
似たり 似たり 似たり 似たり 似たり 似たり 似たり
昔々 昔々 昔々 昔々 昔々 昔々 昔々 昔々 昔々 昔々
昔々 昔々 昔々 昔々 昔々 昔々 昔々 昔々 昔々 昔々
に 備書す

廿二日 朝の雨降る 人の心 せいの せいの せいの せいの
悲小女詞
表す 表す 表す 表す 表す 表す 表す 表す 表す 表す

海を 飲みの せいの せいの せいの せいの

愁を 位す せいの せいの せいの せいの

洗無 位す せいの せいの せいの せいの

たの せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの

い せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの

宿す せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの
是は せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの
むす 又

い せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの

と せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの
乙 せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの せいの

千中出水の竹千子に任然一葉葉の四枚を以て宗波に
題す

却り一徑小沼阿の山一すまの字

又云

象徑とくろろ杖三丈とくりに一楓一本かゝるふを
こゝにこゝに

こゝの柳 象の毛を以て一さう

鳥を以て

物寄の巻を以て一さう
か代やおきれ心す物寄を以て

廿二

ももおハ木魂の竹の交れ月

父の板や木魂の竹の交れ月
笋やおきれ心す物寄を以て
麦の穂や旗の竹の交れ月
一さう(麦の穂を以て一さう)
能の竹の旗の竹の交れ月

廿四 題首柿令

豆板の細く木板を以て名を以て 凡此

及て古木系より木の根所を以て 消息大竹の尚白
より消息を以て 凡此を以て 堅固を以て 尚白
廿五 小那大竹の尚白 史邦丈草尺坊

題首柿令

你對峰峰伴鳥魚 就荒毒似野人居

枝取今只赤虬印 青葉く取堪字書

小督墳

強撓忍情出涼言 一輪秋月野村風

昔奉侍は承終前 何處孤墳竹樹中

茅刈しよるニ染りて茂る樹の空 文章

途中の吟

ほろろきりふくや 枝も梅さくら 史邦

言山舎く感句

杜門覓句陳冬已 對空揮毫森女游

乙州未くて武江の吟并想五分の船紙一を世中

半俗の言肩入るまふとら後す 白井吟をるるかー 史邦

梅の養い ねんき 月

あふまは人子とくふふふふ

字取の山女子ねんきをかしてわる

つらつらとをえくゆく 堪 忍

中の別とくくく 雷煙電陣を就るをく対電陣

大まふかす秘のよー ちひまふふ葉のよー

廿六々

芽刈しよるニ染りて茂る樹の空 文章

くくけの草刈り可くくく 芭蕉

帽生るのよーけまふ角ありて 古来

人のくくくくく 文章

くくくく三度葉印のちやうん 乙州

卯月の中次次の浦一尺と云ふ人より丹山山を感ずるの情は月
の影に似し喜の多味に云ぬる其丹海のすくは秋を感ず
るはしやや物のほかに喜のまじりぬ

更科姨捨月一編

下し姨捨の月一人は喜きしあはれは八月十日のみを
之をきくは数すくぬけぬは秋のまじりぬ喜の多味すあはれ
ものなりを衣文科の里よりあはれは八月十日のみを
く南の御田の橋よりあはれは八月十日のみを
かへはあはれは八月十日のみを

あはれは八月十日のみを
あはれは八月十日のみを
あはれは八月十日のみを
あはれは八月十日のみを
あはれは八月十日のみを

義をかこつと云ふは八月十日のみを
あはれは八月十日のみを

あはれは八月十日のみを
あはれは八月十日のみを
あはれは八月十日のみを
あはれは八月十日のみを
あはれは八月十日のみを

すまひつゝいかにわたりてあはれなるものか

真偽不審と初

煤掃鏡

おののちさうあつていふはあつたかたへさういふ
うらなひも十をすゝむといふはあつたかたへさういふ
何の代はあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ

まふれあかの雪の梅の枝はあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ

松島歌

柳下つゝいかにわたりてあはれなるものか
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ
いかにいふはあつたかたへさういふはあつたかたへさういふ

きりぼりの織むくろ紙子のやをく居了るの舞のなつてと
うかんねきの八人目とまのひらやめらむの陶朱の舟
のそと五箇のゆきこおひ一人の象の影をくくはし
る裁女の紅裙と花嫁の腰袋をくくはし
ぬん行く言のねり佛をくくはし
山よりとめらるるやゆりかたのなつてと象と
おもはんものゆへにをくくはし
にちち小杯のうけかたれと月寺の入あはせぬ
きりぼりの織むくろ紙子のやをく居了るの舞のなつてと

一具菴藏板

文政十年丁亥仲秋刻成

製本所

江戸本石町十軒店

書肆

萬笈堂英大助

